

新型コロナウイルス感染症

雲南市立病院副院長 瀬島 斉

世界や本邦全体では2019年以降、当市でも2020年以降は、「ウイルスで世界はひとつ思い知る」、「ウイルスは人種差別をしませんね」という川柳のように、世界中のあらゆる人々が新型コロナウイルス(COVID-19)の大流行に巻き込まれてきました。そして、3年が経過した今もなお「類似句というよりみんなコロナの句」、「こんなにも神いてコロナはおさまらず」、「コロナからコロナのハシゴするテレビ」という状況が続いています。

当初は、毎日のように某知事から「三密を避けましょう」、「Stay home」と叫ばれ、東京五輪が延期、コンサートやプロ・アマスポーツ競技も自粛、などあまりに多くの事が急な対応や変更を求められ、「テレワーク妻子の前で叱られる」と仕事形態も大きく変わりました。義務教育学校では臨時休校が要請されたこともありました。大学や専門学校ではオンライン授業での対応となり、私自身も、非常勤講師を務めている大学の保育教育学科で、2020年は学生に一度も会うことなく15回の小児科講義を終えました。また、Webもしくはハイブリッド方式での学会開催が広がりました。

日常診療に目を向けると、冬場の風物詩インフルエンザの流行が2020年1月でぴたりと止まり、その後も春から夏にかけて各種ウイルス感染の流行もなく感染症患者が激減、「子供用マスクの配布ありがとう」、「安倍さんの物まねできるマスクです」ではありませんが、人々が手洗い励行とマスク着用、要不急外出や移動を控えるだけでこんなにも感染予防効果があるのかと思われました。

With コロナに舵取りされてはきましたが、引き続き、「トラベルを終えてGo To ホスピタル」とならぬよう、感冒様症状がでた人達や私たち病院職員には、節度ある自粛が求められる日々が続くことと思います。今後はワクチンや治療薬開発などにより新型コロナを一定水準以下に克服し、「コロナでもサンタは来るかと聞く子ども」、「誰一人ボタンを押さぬエレベーター」といった心配が少しでも軽減し安心して過ごせる日が来ることを期待しています。以上、当時からの毎日新聞中畑流万能川柳の句を引用しながら巻頭言を書かせていただきました。